

図書館だより

Library News No.68

Nara National College of Technology

2011年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



上段・下段左・下段中央：読書週間展示の様子。下段右：ブックハンティングの様子

目次

巻頭言 「体験」、「人との出会い」そして「読書」	2
多読表彰について	3
読書週間アンケート結果報告	4
平成 22 年度読書感想文コンクールを終えて	5
読書感想文入賞作品紹介	7
学生図書委員会活動報告	15
読書週間行事、Information	16

「体験」、「人との出会い」そして「読書」

電気工学科 藤田 直幸

試合終了の笛が鳴った。感動した。残念ながら優勝は逃したが、ラグビー部のメンバーは本当によく頑張っていた。寒い中、神戸までと思うと、なかなか重い腰を上げられなかったが、今年は、卒研生のK君が出場していたから全国大会の応援に出かけた。彼は、電気工学科では少々専門違いの化学的な方法で新材料を作る研究テーマに試行錯誤しながら一生懸命取り組んでいた。実験が全くうまく行かず、がんばっているのに結果が出ないという状況が数カ月続いた。もうダメかなと思って、あと1週間がんばってダメだったら、テーマを変えようと私から提案した。しかし、彼は、その壁を乗り越え、春の国際学会で発表できるまで研究を進めた。彼にとって、時間をやりくりして卒研と部活に取り組むことは、楽しいことより、苦しいことや辛いことの方が多かっただろう。でも、その体験の中で、彼は、学び、成長したと思う。「体験したこと」— それは、体験したその人だけが持つことのできる貴重な財産だ。時には、様々な失敗や挫折もあるだろう。でも、それら含めた経験が、その人を形作っていくと私は思う。若い皆さんには、失敗することも許される今だからこそ、いろいろなことに挑戦し、体験を重ねて、成長して欲しいと思う。

「人との出会い」もまた、「体験」と同様に人生を豊かにする。去年から、私は、女子中高生の理系進路選択支援事業に携わっているが、この活動を通じて、女性技術者や女性研究者の方のお話を伺う機会に恵まれた。女性が働くことには、男性とは違った課題があることや、それらを乗り越えて頑張っておられることに、今更ながら気付かされ、女性と共に働くことに対する私の価値観や考え方が大きく変化した。人との出会いは、もちろん、楽しく愉快なものばかりでは無い。時には、気が合わない人や、全く違う考え方をする人、批判をしてくるような人も出会うだろう。しかし、それらの出会いの方が、往々にして、気がつかなかった自分の欠点や、新しいモノの見方などを知るチャンスになることが多い。だから、殻に閉じこもるのではなく、人との出会いに積極的に関わるべきだ。アクティブに活動している人が出会える人数は、そうでない人に比べて圧倒的に多い。「人との出会い」— これもあなたの人生の宝であると言えよう。

人生を豊かにする3つ目のモノは、「良質な書物との出会い」である。良い本と出会うことは、「体験すること」、「人と出会うこと」と同じくらい、私たちの成長に影響を与える。私が、工学の道を選んだのは、小学生の時に読んだエジソンやガリレオの伝記の影響かもしれない。教師をしているのは、「次郎物語」の先生に憧れたからか？ 30年ほど前に高専で学んでいた頃には、武者小路実篤の積極的な考えに生きる力を得ながらも、太宰治の自分の無力さに打ちひしがれる思いに共感したりした。携帯やインターネットで人間関係を築く時代とは、書かれた時代が全く異なるが、文学全集に収められているような少し古い名作を読むことも、皆さんにとって無駄にはならないことだと思う。良い本に出会うと、読書の前と後で、考え方やモノの見方、信念などに変化が起こる。魂が揺さぶられるような経験を読書を通じてしたことのある人は、幸いだ。

そろそろ今年度が終わろうとしている。この1年で、あなたは、どれだけ、そしてどんな成長を遂げることが出来ただろうか？ あなたが本当の意味で成長できた「体験」や「出会い」、「読書」があったらだろうか？ 来年度は、積極的にこれらを求めて、皆さん一人一人が、自分の成長を実感できる年として欲しいと心から願っている。なぜなら、学生が成長する姿を間近でみることは、教員にとって、最も大きな喜びだから。

多読表彰について

図書館では、毎年、4月から12月までの統計結果に基づき、1人あたりの貸出冊数が多かったクラス・専攻を表彰しています。結果は下記のとおりです。

【専攻・クラス】

第1位	機械工学科4年	(21.4冊/人)
第2位	機械工学科5年	(21.0冊/人)
第3位	電子制御工学科5年	(19.5冊/人)
第4位	電子情報工学専攻1年	(18.7冊/人)
第5位	機械制御工学専攻2年	(18.5冊/人)
第6位	電子制御工学科3年	(14.0冊/人)

授賞式は1月7日(金)昼休みに校長室にて行われました(6ページの写真をご覧ください)。副賞として各クラス・専攻ごとに希望図書購入の権利が与えられます。

なお、今年度は初の試みとして、個人の多読表彰も実施しました。同じく貸出冊数の多かった学生10名を表彰することにしました。

【個人】

第1位	機械工学科5年	関口	大さん
第2位	機械工学科2年	澤井	久実さん
第3位	機械制御工学専攻2年	村上	智亮さん
第4位	機械工学科4年	成田	雄作さん
第5位	電子制御工学科5年	浦井	健次さん
第6位	情報工学科3年	岸本	光さん
第7位	電子制御工学科5年	内元	達也さん
第8位	電子制御工学科3年	吉村	航平さん
第9位	電子制御工学科1年	高代	侑弥さん
第10位	機械制御工学専攻1年	木ノ元	悠介さん

個人の表彰者には賞状とともに副賞として図書カードを図書館より贈呈しました。

来年度も学生の皆さんが図書館を大いに利用して頂けることを期待しています。



今年度も実施しました!! 読書週間アンケート結果報告

情報メディア教育センター副センター長（図書担当） 鍵本 有理

秋の読書週間の期間、図書館の展示を見てくれた学生の皆さんに、プレゼントクイズへの応募とともにアンケートの記入をお願いしています。今年度は昨年度を若干上回る 76 名の学生からの回答がありました。その集計結果をここに紹介します。集計作業は図書委員会委員長山本賢佑さん・副委員長菅原惇史さんが担当しました（アンケートについて、回答した学生の氏名等は学生図書委員には分からないようにして分析処理をしています）。

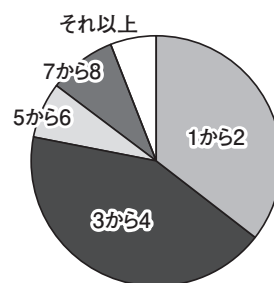
「月に何冊本を読みますか（雑誌・漫画を除く）」という問いには、1～2冊が27名、3～4冊が30名となっており、読書週間の展示を見に来る学生はやはり日頃から本に親しんでいる人が多いようです。

「あなたの読む本のジャンルは？」（複数回答可）については、小説（32）と専門書（32）が同数で一番多く、次いでライトノベル（28）、エッセイ（26）、その他文学作品（14）、ノンフィクション（10）、SF・ファンタジー（16）となっています。お気に入りの本を自由に書いてもらったところ、さまざまな記述がありましたが、複数の学生が挙げていたものとして、人気作家有川浩の「図書館戦争」「塩の街」などが5名、また展示していた「はやぶさの大冒険」2名、その他「推理小説」「伊坂幸太郎」、最近人気の「屍鬼」「キノの旅」「ハリーポッター」「夢をかなえる象」などの回答がありました（昨年に引き続き、本心からかウケねらいか、「高専の数学2」を挙げた学生も2名いました……）。

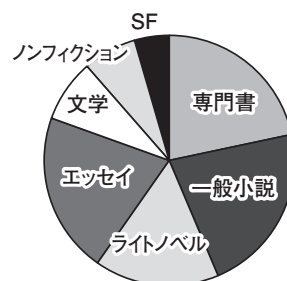
「何で読書週間を知りましたか」の項については、「ポスターを見て」が昨年と同様一番多く、また実際に図書館の展示を見て知った人が多かったようです。ポスターは今年度も矢鋪知哉さん（図書委員会会計）が作成しました。

なお、プレゼントクイズの正解者の中から例年通り、抽選で3名様に図書カードをプレゼントしました。来年度も実施予定ですので、是非ご協力をお願いします。

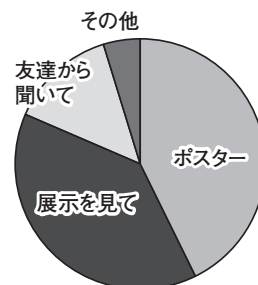
月に何冊、本を読みますか



読む本のジャンル



何で読書週間を知ったか



平成 22 年度

読書感想文コンクールを終えて

情報メディア教育センター運営委員会

情報メディア教育センター運営委員会主催・第 35 回読書感想文コンクールの結果を発表します。応募総数は 374 編。その中から、情報メディア委員会委員と国語科教員、計 10 名による投票・審査の結果、次の 8 編が優秀作として入選となりました。以下に、その氏名を記し、その栄誉をたたえたいと思います。

最優秀賞

該当なし

優秀賞

電気工学科	1 年	中平 悠大	砂糖は語る - 「砂糖の世界史」を読んで -
電子制御工学科	1 年	今西 悠	日本語の豊かな表現力は英語で表せられるのか
情報工学科	1 年	高樋 美奈	“何をすべきか”ではなくて
物質化学工学科	1 年	森 奈津子	経済情勢の変化に対応した政治とは—『将軍と側用人の政治』
電気工学科	2 年	村上 妃音	現代に生きる宮沢賢治
電子制御工学科	2 年	有川 耀祐	生きることの意味を問う
情報工学科	2 年	中野 啓太	「今の自分と理想の自分」
物質化学工学科	2 年	阪田 敬	共感できる友達

また、入選には至りませんでした。審査の過程で高い評価を受けて佳作とされたものは、以下の諸君の作品です。これらの諸君にも賞賛の辞を呈したいと思います。

佳作

1 M 津川 浩哉	1 M 早瀬 康洋	1 E 前川 啓一郎	1 S 木村 和人
1 S 梶原 雄士	1 I 増田 己咲	1 C 齋藤 聖	1 C 染川 直紀
1 C 中野 雄太	2 M 今西 賢	2 M 澤井 久実	2 M 中澤 順平
2 E 村田 真奈美	2 S 中川 千代之介	2 S 原 拓也	2 I 西川 雅清
2 C 宗岡 詩織	2 C 山崎 麻里亜	2 C 大和 道子	3 E 森川 雄介
3 I 一ノ瀬 智浩			

その他にも、力作が多くありました。このコンクールがこれだけ長く続けることができているのは、仕方なしにでも参加してくれる諸君の作品をも含めて、ある程度以上の応募数がずっと確保できたからです。そういう意味で、応募してくれた諸君全員にお礼を言いたく思います。

以下、恒例にしたがい、入選作のいくつかについて、審査に携わった者の一人としてコメントを付します。

本コンクールは、審査員が自分が評価する作品に対して得点を与え、そのポイントの合計によって入選作が決まります。数年前までは、その中で抜きん出て高得点を獲得する作品があって、そのような作品には「最優秀賞」が与えられるのが普通だったのですが、今年も残念なことに、「最優秀賞」は該当作なしの結果となってしまいました。そんな中であって、最も多くのポイントを獲得したのは、電子制御工学科 1 年・今西悠君の作品と、情報工学科 2 年・中野啓太君の作品でした。

まず、今西君が選んだ本は『英語で読み解く賢治の世界』。宮沢賢治の詩を、アメリカ人の著者がどのように

翻訳していったか、その具体例を通して、言語表現というものの本質に迫る感想文に仕上がっています。ただ、末尾の「これからは」以下の一文は、少し安易な気がしました。いくら巧妙な訳をしても、英語ではどうしようもない日本語の表現はいくらでもあるし、日本語ではどうしようもない英語表現もきっと多くあるはずです。「日本語の豊かな表現力はどこまで英語で表せられるのか」という問題設定であれば、「最優秀賞」に該当する感想文になっていたのではないのでしょうか。

次に、中野君の作品は、中野君がこの小説に惹かれたのは、主人公のキャラクターが自分によく似ているという点にあることで、その所が、素直に分かりやすく表現されていて、非常に好感の持てる感想文だと感じました。他の審査員の先生方も、多分、同じような思いで評価していると思います。ただ、先の今西君の場合と同じように、中野君の文章も、最後の一文が、安易な気がして仕方がありません。人間の性格とは、そんなに簡単にまったく逆なタイプに変わろうとして変わるものなののでしょうか。中野君が、繊細で優しい内面もっていることは、書いている文章から分かります。生まれてから16年間かけてできた自分の性格です。「今の中野君」のままでも、きっといい人生があると思います。

もう一つ、物質化学工学科1年・森さんの作品をとりあげたいと思います。文学関係ではなくて、江戸時代の側用人政治についての歴史の教養書を選び、その著者の指摘に対する森さんの考えが、論理的に述べられています。最後の「物事の本質を正しく見極めるということ」以下の結びの一文もぴったり決まっています。文体的には、他の応募作品はほとんど全て「です・ます」調で書かれているのですが、森さんは「である」調で書いており、これは、相当な文章力がなければできません。歴史の課題レポートとしてなら、多分、大学でも「優」がもらえると思います。欲を言えば、どこまでが本の著者の指摘で、どこからがそれに対する森さんの意見なのか、少し不分明な所があるように感じました。「著者によれば……」とか「……と著者は述べている」とかいうフレーズを用いることで、「最優秀賞」クラスの商品になると思います。

以上、最優秀賞が出なかったということで、ここでは、欠点の指摘が多くなってしまいましたが、中野君の作品も今西君の作品も森さんの作品も、十分「優秀賞」にふさわしい出来のものであることは、何より、その作品自体から明らかではありません。同じようなことは、ここでは取り上げることができなかった村上さん、有川君、阪田君、中平君、高樋さんの作品についても言う事ができます。よい作品を有難う。個人的に勢田の感想が知りたいなら、いつでも研究室に来てください。待っています。

(国語科：勢田)



読書感想文入選者と多読表彰クラス代表の皆さん（校長室にて）

読書感想文入賞作品

『砂糖の世界史』
川北 稔 著

砂糖は語る

－「砂糖の世界史」を読んで－

1E 中平 悠大

今となつては、一般家庭にも必ずと言っていいほど砂糖があります。カロリーの取りすぎからくる糖尿病の人も少なくないうえ、ダイエットをする人が増えたので砂糖は健康や美容の敵のようにも言われています。甘味に飢えていた昔の人たちからすると想像もつかない話でしょう。砂糖ができた当初は、王族や貴族といった、ごく一部の人しか砂糖を口にすることはありませんでした。しかし、時の流れと生活水準の向上とともに、我々のような一般家庭でも食されるようになりました。今回、僕が出会った本は、砂糖がとても貴重だったころから大衆に広まるまでの過程で人類の歴史をも動かしてきたということを中心に、僕に「砂糖の世界史」を教えてくださいました。

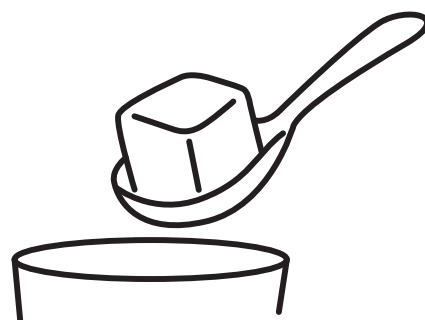
僕がまず一番はじめに驚いたのは、砂糖は奴隷を生み出す原因であったということです。みんなが好む食べ物であり商品価値が高いため大量生産されるようになりました。その時、たくさんの奴隷がアフリカなどから連れてこられたのです。アメリカでも綿花栽培で同じような歴史があるということを授業で習いましたが、その労働条件はとても過酷なものでした。本では、アフリカなどから船で連れてこられるときに不安や先の見えない恐怖から船から飛び降りて自殺する人がいたり、船が目的地に着いてからも生活に慣れることができない人はストレスなどでどんどん死んでいったそうです。大衆化にあたってたくさんの人が犠牲になったことは、やはりとてもショックです。

読み進めていくと、砂糖は貴重な甘味であった以外にもいろいろな存在意義があったことがわかりました。

一つは、他のものと比べたときの砂糖の圧倒的な甘さと神秘的なあの純白の色が権力や地位の象徴のようなものであったということです。紅茶に砂糖を入れるようになったのも、右のようなことが背景にあるそうです。今でこそレモンティーなどはおいしいものですがその当時の紅茶に砂糖というのは、現代でいう日本で、お茶独特の渋みや濁りを楽しむ緑茶に砂糖を入れるようなものでしょう。たとえそのようであったとしても、権力や地位を示したいがために、紅茶に砂糖という高価なダブルパンチで貴族はいばっていたのです。

もう一つは、薬であったことです。砂糖は、もともと貴重なものですから、高価な薬として扱われていたそうです。とりあえず生きていくために最低線の炭水化物を食べて生きていた人々にとって砂糖は、自分たちの手ではおえない一種の秘薬のようなものであったと想像できます。

このように、今回読んだ本には砂糖に関する知識がたくさん記されていて、とても興味深いものでした。今回この本と出会って一番の発見は、何か自分の身近にあるものでも深く深く掘り下げてみると、それぞれにおもしろい歴史があり、たくさん発見があり、一つ一つそれまでとは違う見方ができるということが分かったことです。



『英語で読み解く賢治の世界』

ロジャー・パルバース 著

日本語の豊かな表現力は英語であらわすことができるのか

I S 今西 悠

ぼくは日本語は、他の国の言葉より豊かで表現力のあるものであると思います。これなしでは日本文化は語る事が出来ない最高傑作であると思います。その代表的な仮名は美しく、日本の高貴な文化の中に生まれたもので、気品さえうかがうことが出来ます。それに比べ、僕の英語にもつ印象は、さほど良くなかったと言えるでしょう。それは僕がまだ英語を習い始めたばかりで日本語ほどの知識を持っていないからかも知れません。が、圧倒的に擬声語、擬態語、比喩などの日本語の良い部分を英語で補える気がしないのです。しかし、僕はこの本を読んで、その見方がかなり変わりました。英語の今まで見えなかった奥深さを知ることが出来ました。けれども日本語の方が何倍もいいと思うのですが。

僕はこの『英語で読み解く賢治の世界』を親の薦めで読み始め、すぐにこの本の世界に引き込まれました。僕でも知っているような賢治の詩がいくつも出てきて、賢治の生涯を振り返り、その詩を賢治のその時の心境に、一番近いだろう英文で英訳されていくのです。これを読むことによって詩をつくった、今は亡き賢治の目線で読むことができ、詩がより感慨深いものになったことは間違いないと思います。更に僕が驚いたのは、この作者がアメリカ人だということです。生まれて十六年、日本で育ってきた僕でも、方言などが使われている賢治の詩を理解することは難しいのです。外国の人が日本語をマスターするのは難しいとも聞きます。しかしこの著者は、賢治の詩を読み解けるのです。僕はこの著者を尊敬します。

僕が、何故そこまでこの本に興味を持てたかと

うと、読み始めに、これはすごい！と感じたからです。本の初めの賢治の詩は「雨ニモマケズ」でした。誰もが知っている、賢治の代表作です。ここで僕は、自分なら英語でどう訳すのかということを考えてみました。

I don't lose rain.

自分が情けなくなります。こんな堅苦しい英訳、賢治の世界を全く表現できていません。ならば、この本の著者はどう訳したのか、それに僕はすごく驚きました。それは、

Strong in the rain.

です。Strongを英文の初めに出すことで、「マケズ」という強い気持ちを前面に押し出しているなと思いました。この『雨ニモマケズ』は雨よりも強くありたいという気持ちだと思うので、Strongであっても何の問題も無いと思われます。著者も、初めに強烈な印象を与えたくて、Strongを使ったと書いていました。このように、どんどん他の部分も訳されていくのです。また、自分でも賢治の立場に立って詩を訳し、この本の著者の訳と見比べるということができるのも、この本の楽しいところだと思いました。

僕はこの本と出会って、英語というものの奥深さを知ることができたし、賢治の詩の良さにも、より深く触れることが出来ました。これからは、他の詩に出会ったとき、自分なりに英訳し、その詩を書いた作者の気持ちに立てたらいいなと思います。



『子どもたちのアフリカ』

石 弘之 著

“何をすべきか”ではなくて…

11 高樋 美奈

不道理な世界。生まれてきた国や家によって全く違った環境に直面する。一方では食べ過ぎによる成人病が深刻になり、もう一方では飢餓に苦しんでいます。こういった問題は食べ物のみならず、医師やワクチンといった医療の現場でも起こっています。簡単な治療で助かった命。ワクチンさえ打っていれば発症しなかった病気。ここに医師がいれば…。ワクチンさえあれば…。しかし、ワクチンや医師を派遣すればよいという問題ではありません。例えば、治療や薬品の保存にしても電気が必要です。技術者により発電所が出来れば電気の供給は可能です。けれど、ある発電所は対立中のポイント爆弾により破壊され、働きを失いました。その影響で機器は停止し、保存用の冷蔵庫が使えないためにワクチンは死滅。今まで浄化されていた水も汚水として流れ出し、生活の中から消えただけでなく、様々な病気を広げました。一発の爆弾が齎^{もたら}した死者・負傷者の数は、建設以前より増加したとされているそうです。

わたしは、このような問題に関する本を一冊だけ持っています。中学の作文で「まず、たくさんの現状を学び、自分の中の知識を深める」としていたときに図書館で見つけ、購入したものです。表紙には小さい子の写真と子どもたちのアフリカという文字。“数多く出版されている中のほんの一冊”という気持ちで手に取りました。目次には、飢餓・少年兵・売春・虐殺・エイズ。今まで読んできた本に幾度となくでてきた言葉でした。“お金を得るために売春を始め、エイズに感染。家族を養うため辞めることもできず命をおとしていく。そうして産まれた子どもは、浮浪児と呼ばれるだけでなく、エイズに感染していることが多い”ということは知っ

ていました。しかし、「処女膜によって浄化される」「幼児は抵抗力があり完治する」という噂や宗教の教えがあり、信じている人も少なくない。最近起きた生後六カ月の乳児を犯した事件では、命を奪ったにも関わらず、本人は無罪。一部の地域ではエイズを治す目的だとして正当化されているそうです。極地にたたされば、小さな希望だと考えるのだと思いました。また、国境を越える橋もエイズの拡大地となっているそうです。取締役の警察がいるのになぜ増加の一方なのか。尋ねる著者に一人の少女が答えたそうです。「警察の目を掻い潜っているわけじゃない。あの人達もお客だから。」と。それだけでなく、国境を越えるために我が子を渡す親も。“エイズ”1つにしても、様々な立場にたつ人の思いや考え・政府の動き。今までわたしが知ってきたつもりでいたことは概要であり、一つの見方。知らなかったのではなく、自分で深く知ろうとしなかったのだと感じました。そして、最後の著者の言葉。「わたしがアフリカに関わった範囲内のプロジェクトにおいて、七割は成功に程遠い。失敗しても“アフリカだから”。その国に受け入れ能力がなかったというところから始まり、よく知らなかったという反省の弁。」

最初に挙げた発電所の問題。対立中という状態で、重要性が高まれば狙われるということが予想できなかったのでしょうか。ここでも「必要だという思いを重視しすぎた」という反省の弁。なにをすべきか、たくさんの人が考えています。“医師を育てる”国外勤務により、その国の医師は不足しました。“供給物の増加”主食の変化から農家を圧迫し自給率は低下しました。悪化したものを元に戻し、よくするには何十倍、何百倍もの時間や辛い思いをする人がでてきます。新しい苦痛を生まないためにも“何をすべきか”ではなく、まず“何をすべきではないか”を考える必要があるのだと共感しました。

『将軍と側用人の政治』

大石 慎三郎 著

経済情勢の変化に対応した政治とは －『将軍と側用人の政治』

I C 森 奈津子

江戸時代幕府政治について、これまで私が目にしたもののうち、『享保・寛政・天保の三大改革は善政である』という記述をしているものが非常に多い。

中学でも、それまでのぜいたくな或いは軟弱な社会の風潮によって墮落した政治とそれに伴い悪化した幕府財政を、質素儉約・文武奨励・人材登用・年貢増収等によって一時的にせよ立て直した（享保の改革・寛政の改革）、或いは立て直そうとした（天保の改革）という趣旨の教育を私は受けている。

だが、数学や化学のように、普遍的な『公式』というものが、社会や政治の分野においても存在するのであろうか。

例えば、年貢の増収は支配する側の幕府や武士にとっては、非常にありがたい『善政』であろうが、年貢を取られる農民の立場から言えば、『悪政』であったという解釈がなされてもおかしくはない。

年貢が高くなった反面、なんらかの社会保障政策が具体的に行われ、農民の暮らしが楽になったなどという説明を、これまでに私は一度も受けていないのだから。

そのような漠然とした疑問を抱えていた私が、たまたまこの本を目にした。

『享保・寛政・天保の三大改革の善政』の対極にあるものは、特に柳沢吉保や田沼意次らが主導したと見なされる、ぜいたくな風潮、それに伴う慢性赤字財政・賄賂が横行する『側用人政治』であろう。

で、おそらく将軍の位に就く可能性がほぼなかった五代将軍綱吉や、本家の血筋が絶えたことにより激しい権力闘争に勝ち得て紀州家から迎え入れられた八代将軍吉宗が、これまでのしがらみを断ち切り、

譜代門閥の頂点を極める『老中』たちから政治の実権を奪い、フリーハンドで政治をおこなうための手段として、『側用人』（吉宗の場合は『御側御用取次』という制度を確立したという説明は、非常に納得のいくものであった。

しかしそれ以上に、経済情勢や社会構造が大きく転換している時には、日本的な前例に基づく合議制ではなく、強力なトップダウン式で抜本的な対応が必要であったということが私の心には残った。

経済の急激な発展、或いは大幅な収縮が発生した際、いかに現実を正しく理解し、そして実情に沿った形で経済を軟着陸させることで社会を安定させるかということはなによりも大切である。

そして、彼らが主導した経済政策は後世の我々から見れば、極めて正しい施策であったことに、私は驚きさえ感じた。

だが、経済というものを全く理解できていない権力者、成り上がり者を否定する権力者、或いはその双方を兼ね備えた権力者たちによって、彼らの改革、特に田沼意次の経済政策を完全に否定する。

そして、強引なまでのこじつけによって、『悪政』・『賄賂政治』という『通説』だけが後世に残った。

その結果、幕府財政の抜本改革はもちろんのこと、日本経済のゆがみを是正できなかったことが、最終的には幕府崩壊という最悪の状況へと突き進んでいく姿は、まるでいまの日本の政治・経済の混乱ぶりと類似したもののように私には見えてしまう。

この本を読んで、物事の本質を正しく見極めることと、柔軟な思考がいかに重要であるかということを痛感させられた。



『宮沢賢治大全集 第十巻』

宮沢 賢治 著

現代に生きる宮沢賢治

2 E 村上 妃音

「セロ弾きのゴーシュ」は、宮沢賢治が病床にありながら、何度も推敲を重ねて書き上げた作品だといわれている。ゴーシュが夜通しセロの練習をした水車小屋は、賢治の病床の中にあっただの。賢治は子供の頃から映画が大好きだった。当時映画は白黒の無声映画で、上映時に小さなオーケストラが生演奏をつけていたそうだ。そこで西洋の音楽に出会った賢治は、チェロが大好きになり、元気だった頃は友人と共に舞台に立ち、チェロを演奏したこともあったという。賢治にとってゴーシュという人物は、もう一人の自分の姿だったのかもしれない。

賢治は、ベートーベンの曲が大好きで、病魔と闘っている時も、病室で蓄音機のラッパに詰め物をして、ベートーベンの曲を聴き続けていたそうだ。奇想天外な世界を自在に創ることができた賢治は、卓越した想像力で、ベートーベンが描き出す世界の中を、のびのびと遊んでいたのではないだろうか。

私は、主人公のゴーシュと金星音楽団が演奏したベートーベン交響曲第六番の田園を聴いてみた。賢治が蓄音機に耳をすり寄せて目を閉じ、じっと聞き入っている様子を思い浮かべながら。

穏やかな日差しの中、緑があおあおとした田園を包み込むように、見渡す限りの大自然が広がっている。ゴーシュのもとに現れる様々な動物たちが、あちらこちらで楽しそうに遊んでいるのが見えるようだ。

太陽がきらめいていた田園に、嵐のように雨が降り、風が吹き、大自然の脅威を感じさせる。そんなありのままの風景を、ベートーベンは説明のつかないほど迫力のある交響曲に表現した。賢治はそれを、セロ弾きのゴーシュという作品の中で、見事に文章で演奏してみせたのだ。

文章や音楽などで、誰にでも伝わるように何かを表現するというのは難しい。アメリカのブルースという音楽の独特のリズムは、機関車がシュッポ、シュッポと煙をあげて走る響きに由来するそうだ。

私が演奏する筑前琵琶の楽曲には、馬が豪快に駆けるさまが、よく使われている。演奏が上手であれば心地よく頭にイメージがわきあがってくるが、演奏が下手だと聴き手は現実に取り残され、不協和音の中で苦しまなければならない。

わずか一週間足らずで、聴き手に心地よくイメージをわかせる演奏技術を身に付けたゴーシュに、楽長が「体が丈夫だからできたのだ。普通の人間なら死んでいる。」と声をかけた。その言葉は、真実だと私は思う。自分の創り出す世界に、聴き手を引き込んでいく表現力を身に付けたい、それは一生をかけて成し得る、あるいは一生かけても成し得ることができない、演奏者にとって果てしなく大きな目標である。それが、どれほどに難しいことであるか、私は知っているのだ。

自分の命を削る様にして、たくさんの作品を世に残したベートーベンと宮沢賢治。もしもベートーベンが、賢治の作品を読むことができていたら、賢治が田園からセロ弾きのゴーシュを創り出したように、タクトを振るだけで、ぱっと宮沢賢治のミラクルワールドが広がるような、素敵なお交響曲を残してくれたかもしれない。



『いちご同盟』

三田 誠広 著

生きることの意味を問う

2S 有川 耀祐

ああ、自分がいる、と思った。三田誠広さんの「いちご同盟」を読み進んでいくうちに、そんな気持ちになった。

主人公の北沢良一は、母親が自宅でピアノを教えている、良一自身も別の先生についてピアノを習っているが、一体何のためにピアノをしているのか、ふっきれない気持ちを抱えています。

そんな良一はときどき、小学五年で自殺した少年のことを考える。

ある日良一は、同じ中学の野球部のエース羽根木徹也から、自分の出場する試合をビデオに撮ってくれと頼まれ、徹也が活躍する姿を撮ったビデオを持って、徹也と一緒に入院中の少女を訪ねる。

その少女は上原直美と言い徹也の幼稚園時代の同級生だ。

その日から三人の交流が始まっていくが、「いちご同盟」は、冒頭部分から読む人をはっとさせ、その小説を読み出してよかった、と思わせる雰囲気を持っていると思われる。

読者は良一の行動をそのまま辿りながら、彼がいるのと同じ場所に立たされるような感じを受けるのではないか。

では、良一とともに読者が感じることは何かと言うと、自分と自分の周囲の世界がせめぎあう、肌のひりひりする感覚だと思う。

学校生活や家族は、良一にとって自分とは別の価値観を持って動いているように見える。その違う価値観を持つ最も身近な存在が、自宅でピアノを教えている母親なのだが、良一は母親の演奏方法やピアノ教師としての生活に疑問を持っている。母と子の間には、ピアノという共通の楽器がありながら、ピアノの練習の仕方、ピアノの音楽というものに対する考え方が違う

のだ。けれど、違うのではと思いつつ、良一はどちらが正しいのか決定的な結論を出せない。良一自身が自分のピアノの演奏の水準に苦しみ、またピアノを弾いていくかどうかということ自体に迷いがあるからだ。

私が、自分のようだ、と思ったのは、そんな良一の姿だった。

良一の悩みが、今の私の悩みと似ているからだ。

私と良一は根本的に似ているのだ。

それは、自分を取り巻いている世界が、自分より圧倒的に大きく強く、自分と別の価値によって動いていて、それと自分の望んでいることとは違うのだ、ということだ。でも自分はこうなのだと言い切れるだけのものを持っていない、そういうものを見つけられなくて迷っている。そんな気持ちが良一に似ていて、今の私のようなのだ。

三人が出会い、互いに影響を受け、相手に対して深い感情を抱くようになるのだが、そうなることにより良一は問題にぶつかる。

それは、人間が生きるとはどういうことか、ということだ。

少年の自殺の問題が、大きく良一に迫ってきます。

人間は死ねばお終いだから、生きていてもしょうがないのか。

だったら死んでしまえばいいのか。

それでも生きていくというのは、どういうことなのか。

人間はなぜ生きていくのか。

進学の問題、母との確執、直美に会いに病院へ行ったりする生活の中で良一は色々なことを感じる。自分にもぶつかることを誠実に感じ出来る範囲で出来るだけのことをする。そうすることで、良一は自分自身と戦い、運命と戦っているのだと感ぜられる。

「いちご同盟」は良一達と同世代の人たちは勿論、世代を越えてひとりでも多くの人に読んでほしい小説だ。

『THE MANZAI』

あさの あつこ 著

「今の自分と理想の自分」

2 I 中野 啓太

僕はこの夏、あさのあつこ氏の「THE MANZAI」を読んだ。といっても、僕はこれまでに、二度この本を読んでおり、今回が三度目の読書となる。初めてこの本を読んだときから、他の作品にはない不思議な魅力を感じていた。

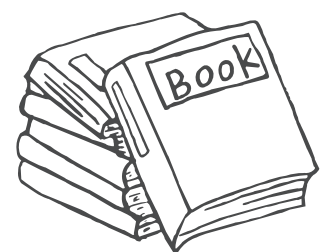
この物語は、とある関西の中学生達の青春を描いた物語である。主人公である瀬田歩は、やや内気な性格で、人と係わることを好まないという少しばかり陰気な印象を与える少年である。そんな彼の運命を大きく変えた人物が秋本貴志である。彼はとても陽気で社交的で、常にみんなの中心にいる、いわば瀬田とは正反対の人物である。そして、そんな正反対な二人が、秋本の強引な誘いにより、なんと漫才のコンビを組むことになってしまう。やがて二人は、文化祭の舞台上、見事な漫才を披露する。

この物語を僕は三度も読んだ。その理由として、一番に挙げられるのは、主人公である瀬田には、自分とよく似ている点があり、物語に対してとても親近感が感じられたからである。どのような点が似ているかという、いつも自分の発する言葉に気を遣っていることである。自分の主張を話すときはもちろん、中学生らしい他愛のない会話でさえも彼は、自分の発した言葉によって、人を傷つけてしまっていないかを、常に気にしていた。そのため彼は、誰に対しても当たり障りのない会話しか出来ずにいたのだ。そして、自分もそんな彼と同じだった。常に会話に気を遣い、自分と相手は壁一枚隔てて会話をしている、そんな感覚でしか会話が出来ずにいた。そんな僕に、変わるきっかけを与えてくれた人物がいる。その人物こそ、最初に紹介した秋本である。

彼は、最初に述べたように、瀬田とは正反対の人物で、僕は彼に対して憧れのような感情を抱いてい

た。しかし彼は、最初に述べたような、美点だらけの人物ではないのだ。図々しくて、やや強引等といった汚点もしっかり持ち合わせている。そんな彼に対して憧れを感じる点は、そんな自分の汚点を決して隠そうとしないことだ。どんな時でも、自分をよく見せようとはせず、ありのままの自分を曝け出している。僕はそんな彼の生き様に対して、こんな風に生きられたらどれだけ楽だろうか、と感じた。そしてふと思った。ひょっとして僕は、相手を傷つけるのが怖いからではなく、相手によく思われなくて、嫌われたくなくて、会話に気を遣っていたのではないかと。だとすれば、僕はこれまで相手を気にかけて、守っているようなつもりでいたのに、実は自分のことを一番に考え、自分が傷つかないように気にかけていたことになるのだから、それはとても情けないことである。だから僕は、秋本のような、自分をきれいに取り繕うことはせず、ありのままの素の自分を曝け出せる人物になりたいと決心した。事実、僕とよく似ていると述べた瀬田も、秋本と出会ってからは、少しずつではあるが変わっていている。恐らく彼も、この物語の中の、読者の知らないどこかで、僕と同じ決心をしたのだろう。素の自分でいれば、自分のことを嫌い離れて行ってしまいう人も出てきてしまうだろうけど、素の自分であるからこそ、ぶつかり合える仲間も出来るはずだ。ならば僕は、今までの無難に取り繕った自分を脱ぎ捨て、素の自分で正面からぶつかっていくこと選ぶだろう。

今の自分について気付かせてくれただけでなく、理想の自分へと変わるきっかけを与えてくれたこの本には、本当に感謝したい。



『蹴りたい背中』

綿矢 りさ 著

共感できる友達

2 C 阪田 敬

孤独を感じる状況というものは多かれ少なかれ、あるものだと思う。例えば僕の場合、休日に一人で家にいるとき、友達に遊びに誘われるが用事があるて断らなければならないとき。「孤独を感じる」と言えども大層に悩みつめる程ではないが。

僕の今回読んだ図書「蹴りたい背中」に登場する主人公のハツは高校で友達を作ろうとしない孤独な女の子。そんなハツは理科の実験中自分と同じように孤独な男子「にな川」に出会う。しかし、このにな川、どこかおかしい。先生に隠れて読んでいた雑誌がなんと女性ファッション誌なのだ。どうやらにな川はその雑誌に載っている「オリチャン」というモデルのファンらしい。ハツは中一のころ町の無印良品でオリチャンに会ったことがあるため、にな川は無印良品のどの辺にオリチャンがいたかをハツに紙に詳しく書いてもらおうと思ひ、ハツを自宅に呼ぶ。ハツはそれをきっかけに、にな川との友達としての距離を縮めていく。僕はこの小説に一般性と特異性の両方があると感じた。一般性の感じ取れるところはストーリーである。孤独な女の子が同じように孤独な子を見つけ友達になる、これは如何にも現実的で一般的なストーリーではないか。

一方、特異性。ハツのにな川に対する愛情とも友

情とも言えぬ不思議な感情である。文中には「無防備な背中を蹴りたい。痛がるにな川を見たい。」や「にな川の傷ついた顔が見たい。」などの表現がある。これはとてもじゃないが友達になろうと歩み寄る際に抱く感情ではないだろう。とも思えば、風邪をひいたにな川の家へお見舞に行く、にな川の唇を舐めるなど愛情に近いものも感じられる。にな川だけでなく、僕まで彼女の行動には困惑させられた。

結局のところ、ハツはにな川をどのような対象として見ているのだろうか。ハツはにな川に「高校にいる他の人間との違い」を共感してほしかったのではないかと思う。彼女の「孤独」はもはや孤高の一匹狼のようであり、自分から孤独であることを選択して他人を寄せ付けないバリアを張っている。しかし、何故かにな川にはバリアを取り払い、会話しているように僕は感じた。似たような境遇であるにな川と「他者との違い」を共感してほしい、という思いが文中の会話文から読み取れた。しかし、結局ハツは「自分は他の人間とは違うんだ」と思いながらもバリアを取り壊し、友達を作りたいのではと感じた。バリアを取り壊したいのに、もう一枚のバリアが邪魔をする。友達を作りたいが、何かを恐れる自分がいて、友達を作ることができない。

そんな彼女が二枚のバリアで葛藤する姿は「青春」という言葉がしっくりときた。僕は彼女が送っている「青春」の日々にどこか美しさを感じたのであった。

皆さんへの注意とお願い

毎年、読書感想文コンクールに多数の学生が参加しており、情報メディア教育センター運営委員会としても非常にうれしく思っています。しかしながら残念なことに、応募してくれた作品の中には、インターネット等に出ている感想文や書評、その他いわゆる読者レビューなどを写したものが見受けられます。

「参考にしただけ」という意識の人もいるようですが、やはりそれは「盗作」であり、学生としても社会人としても許されないことなのです。あとがきなどから「引用」する場合は、引用であることを明記する方法があります。日頃のレポート等も含め、拙くても「自分の」文章を書くように心がけてください。

今年の活動報告書

学生図書委員会

3 S 菅原 惇史

この欄には昨年も書かせて頂いた記憶があります。また私が書いているということは、図書委員の皆さん、誰もやる気がなかったということですね。……などと愚痴で字数を稼いだりしています。

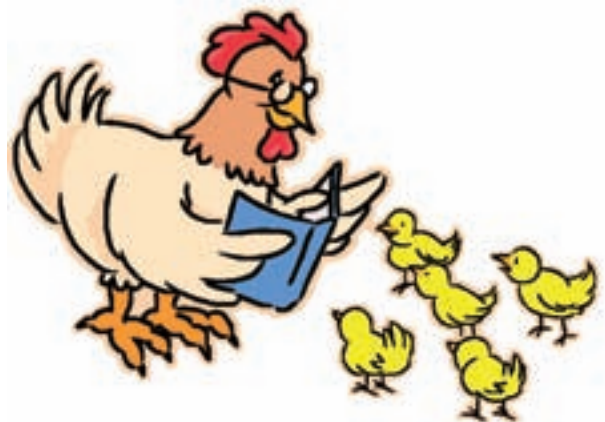
今年度は副委員長をやらせて頂いていたんですが、ハッキリ言って特に仕事はなかったです。副委員長の仕事と言えば、図書委員会の時に委員長の横で立ってるだけ（時々ホワイトボードに文字を書いたりすることはありますが）です。しかもその委員長がよく喋る喋る。お陰で頷いているだけで良いことが多かった（一度だけ委員長が遅れてきたんですが、その時は本当にどうしようかと思いました。部屋が完全に冷え切っていましたね。あの時、その場にいた図書委員の方には覚えがあると思います）です。

ただただ副委員長の昨年の感想をダラダラと垂れ流していた訳ではありません。副委員長でもあまり仕事がないのでただの委員なら委員会に参加しているだけでほぼ仕事はない（あの委員会の時間がダリィンだよという現図書委員の方がいたらお詫び申し上げます）と思います。委員長になったらどうかは知りませんが（少なくとも、現図書委員長は二度と委員長なんてやりたくないと申しております）……。

何が言いたいのかと言うと、要するにブックハンティング（参加すれば結構自由に本を選べますよ。少なくとも、私はかなり自由が効いていましたね）などに参加したいけれど、委員会の活動が面倒臭そうだから参加しないという方がいるのなら、参加してみてください（多分そういったことを奨励するコーナーだと思うので）と、いうことです。他の委員会がどうかは知りませんが、図書委員会はそんなに数が多いとは思わない（完全に私の感覚です。これを読んで入った方が多いと感じても私に責任はございません）ので。

昨年は好きな本についてダラダラと書いた覚えがございますので今年は図書委員の仕事について（ただの活動報告だ、などとは言わないで下さると有難いです）書いてみました。これを読んで図書委員の方の数が増えたらいい（もちろん、増えたところで私にメリットはないのですがね。けれど、そういったことを書くべきコーナーだと思うので）と思います。

最後に、来年は誰か別の方に書いて頂きたく（書きたいという方は是非図書委員会へ）存じ上げます。



図書委員会活動報告

読書週間行事

(10月29日から11月15日まで 於：本校図書館)



全国読書週間の期間に合わせて、毎年実施している読書週間の展示。今年度は10月29日から11月15日にわたって行いました。

今年度のテーマは「最新技術に関する本」でした。そのテーマに添って、宇宙技術やエコカー技術、3D技術、プログラミングなどに関する本を展示しました。

Information

最近のイエローカード集 ~皆さん気をつけて!~

その1 データは必ず《テイクアウト》で

皆さんが授業などで使う**演習室のパソコン**。最近、自分の電子データを置いたまま退室してしまう人が増えています。「ちょっとだけ」と思っているかもしれませんが、この頃のデータは容量が意外に大きく、すぐに使用可能な容量を超えてしまって他の人に迷惑をかけていることがあります。**データは必ず自分のUSBメモリなどに移して帰る**ようにしてください。

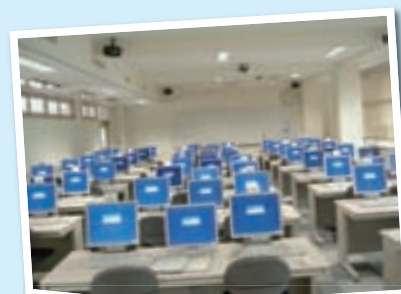
また、そのUSBメモリをパソコンに差したまま忘れる人もいます(残念ながらその場合は二度と戻ってきません……)。というわけで、**USBメモリもお忘れなく**。(LL教室や情報処理演習室・マルチメディア演習室も、図書館と合同で運営されています)

その2 おやつは外で

図書館やLL教室・演習室に、お菓子の包装紙・食べ物のゴミやペットボトルが落ちていることがあります(なぜ!? どうして!?)。もちろん**飲食禁止**です!! 自分の本やパソコンであれば、食べ物で汚したりしてもとがめられませんが、**皆で利用するもの**です。また、自分の部屋ではありません。マナーは守ってくださいね。

その3 静かにしてね

試験前などは特に図書館の利用者が多くなります。それはよいことなのですが、何人か連れだって来て、勉強の合間に(あるいは勉強をそっこのけにして)私語をしている学生が増えてきます。無駄話は当然禁止ですが、どうしても**勉強を教え合うという場合も小声で話す**ようにしましょう。お互いが気持ちよく使えるように、ご協力をお願いします。



編集後記

2010年は国民読書年でした。皆さんの心に残る本は見つかったでしょうか。

図書館では、引き続き、皆さんが良書に出会う機会を提供していきたいと思えます。皆さんからの図書の購入希望も常時受け付けていますので、読んでみたい本がある人はぜひ申し込んでみてください。

最後になりましたが、お忙しい中寄稿くださった方々、紙面作りにご協力いただきありがとうございます。

(図書館)

奈良工業高等専門学校 図書館

〒639-1080 大和郡山市矢田町 22

TEL 0743-55-6015

URL <http://www.nara-k.ac.jp/library/>



この冊子の印刷には、環境に優しい大豆油インキを使用しています。